



徳島新聞ウェブサイトより抜粋

100年前サンディエゴで  
夢を追い駆けた私の先祖  
デビス有里

幾原知重  
日本人初民間  
パイロット  
1887-1916

小松島港の近く、散歩する親子連れやウオーキングにいそむ市民がまばらに行き交う遊歩道。足元に映る木陰のまだら模様を踏みしめながら海を背に歩を進めると、沿道に黒御影石製の碑を見つけた。「民間航空発祥の地」と刻まれている。

「ステーション」の名が示す通り、同所は小松島駅跡として知られているが、実は徳島で初めて飛行機が空を舞った地でもある。「ここから大叔父が飛び立ったんですよ」。幾原敏典さん（67）＝小松島市金磯町、会社役員＝が話し始めた。

同町出身の幾原知重氏（一八八八―一九一五年）が小松島上空を飛行したのは一九一三年十二月十五日。小松島駅が開業して半年余りが過ぎた風が強い年の瀬の一日だったという。

知重氏は単身渡米し現地の飛行学校に入学、世界で二百四十四人目の「万国飛行免状」を同年七月に取得して帰国。その後再び渡米し、最新式の複葉機を購入し日本に戻った。

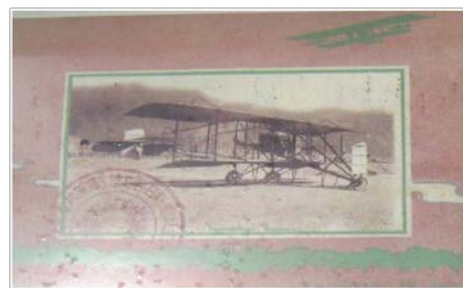
二度目の帰国当初は京阪神で、新聞社主催の飛行会で腕前を披露する日々を送っていた。「都会でも珍しかったんでしょう。ほら、こんなに大きく連日紹介されている」。敏典さんが色あせた当時の新聞を数部取り出す。一面に躍る「幾原氏大飛行」の大見出し。兵庫県西宮市の鳴

尾競馬場を観覧席に、十万人を超える観衆を集めた、とされている。英雄と化した知重氏が郷土に凱旋（がいせん）の「小松島郷土飛行」当日。前日にも予定されていたが、突風のためあえなく中止。二日目も天候が悪かったが西は池田、南は海部から詰め掛けた大勢の観客を前に、知重氏は意を決して飛び立った。

当時の記録によると、日ノ峰方面へ西に向けて飛び立ったものの、数分間の飛行の後に水田へ不時着陸。敏典さんは「竹とんぼのように回りながら、落ちていったと聞いています」と付け加える。知重氏はその際に胸を強打し、それが原因となって大病を患い二十七歳で生涯を閉じた。

人が空を飛んだ一。郷土の空に描いたはかない夢舞台から約八十年が過ぎた九四年春、地元ロータリークラブが石碑を設置する。命をかけた知重氏の功績をたたえた。

ステーションパークの片隅にひっそりと建つ碑は、二月とは思えないやわらかく暖かな日差しを受け、つやを帯びている。敏典さんは碑を見つめながら「自分の姓を知ると『飛行機の幾原さんで』と今でも言ってくれる人がいる。確かにその時の飛行がきっかけで命を落としたけど、古里のために飛んだことは、本人も後悔していないのではないのでしょうか。



### カーチス複葉機

知重がサンディエゴから持ち帰ったカーチス複葉機。ちなみに当時のお値段で5000円だったとか。



### 民間航空発祥の碑

知重の功績を称えて地元のロータリークラブが建立してくださった。ありがたい。